

「究極のリラクゼーション空間を体感すること」それが今回の研修テーマの1つである。

体感するにしても、本当に安らげるのか、心地よいのか、リラックスできるのか、まずその手掛かりを探る為に人間の「五感」に着目した。

バリの伝統様式で造られたヴィラやひとつの田園風景を内包したかのようなリゾートホテルのランドスケープ、それらのインテリア及び環境が、人体にどう作用するのかを人間の「五感」を通して体感することで、感覚として身に着け、計算からではない感性を養うチャンスであると考えた。

昨今のリラクゼーションブームにより、最近の旅行雑誌などには、非日常空間や大自然との共生、癒し空間などが特集として取上げられ、国内リゾート建築にもバリの建築様式を取入れた空間を多々見るようになってきたが、実際に本物を体感して気付いた事は、表層なデザインだけではなく、やはり人間の五感に密接に係っていると言う事である。

まず、ホテルのエントランスにおいては滞在者を招き入れる花びらにより、香りといった嗅覚や色彩といった視覚的効果により、それまでの長旅から解き放たれ、期待感を煽りながらプライベートなヴィラへと移動する。

さらに玄関の戸を開くと独特な御香の香りにより、とてもリラックスしながらベッドルームで眠りに付く。存在感のあるベッドは今まで体験したことのないくらいフロアレベルから高く設定されていて少々上がり難いが、この理由は翌朝知らされた。朝カーテンを開け、ベッドを背にして3面を閉じられていたガラス戸を全開にすると、心地よい穏やかな風がベッドの下を通り抜け、部屋の隅々まで風が通り抜ける仕組みだ。さらにその高さ故、寝転がっても開放的な開口部から、視覚的にウブドの原生林や渓谷など、熱帯気候特有の鮮やかな花々を見渡すことができ、野鳥のさえずりや青々とした草が風に揺れ動く音など、聴覚にまで作用してくる。

それだけではない、扉の取手や外部のサッシ枠といった直接肌に触れる素材には自然木を使用したり、バスルームに至っては床及びバスタブまで大理石、天井には伝統様式の竹組により視覚的、触覚的に構成されている。

これらのインテリアは「五感」を通して密接に関わり合い、環境との調和により心に響く環境を形成していることが解った。

今回の研修を通して、人間の「五感」を意識した空間こそが、ホスピタリティーを追求するバリのリラクゼーション空間そのものであるということをおもって実感し、体験した感覚を今後の設計活動に繋げていきたいと思う。

